

評論文をどう読み、どう深めていくか

黒瀬直美

一 はじめに

教壇に立つてから、すでに二十年を過ぎようとしている。初めて教壇に立つてから、その責任の重さに潰されそうになりながら、目の前にいる生徒がどうやったら学習に集中できるだろうか、どう授業を展開したら学習に取り組み、深まるだろうか、常に自問自答しながら、迷いの中でどうにかこうにか日々をしのいできた、と言うのが正直なところである。

本研究協議では「読解力」の育成を中心課題とし、今回は説明的文章教材の学習指導について、検討するという趣旨であるが、果たして、私が教壇に立つてから二十年の間に生徒の実態は変わったのかどうか、と考えてみるに、生徒実態の全く違う学校への四度の異動を経てきたため、同条件での比較はできようはずもない。時代の流れで生徒実態が変化し、読解力が低下したのか、それとも、読解力の低下は学校間格差の問題なのか、私自身、その原因をはっきりつかめないでいる。

この春、本校に異動となり、難関と言われる選抜試験を通ってきた生徒に接し、今までの自分の指導方法、生徒観を揺さぶられる日々を送っている。その手探りの状態の中で、今教育現場で生徒の読解力育成のために何をすべきなのか、私自身の視点で分析してみたい。

最初にお断りしておくが、今回の発表では、高等学校国語総合で扱った「自然と人間の関係をとおして考える」(内山節氏・大修館書店)の学習指導について、私自身の実践報告に加えて本校教員二名の実践報告を部分的に紹介し、分析しつつ、問題点を明らかにしていくものとする。

二 生徒の実態

本校の生徒は、全体的に学力は高い。知的好奇心も強く、身近な親しみやすい話題よりも、学問的な高度な話題を好むようである。書いてあることをそのまま抜いて答えればよいといった、作業的な指導よりも、書いてあることをさらに発展させた問いに食いついて

いくタイプの生徒が多い。しかし一方で、その高度さに遅れをとり、ついには間を開けられてしまい、学習意欲を持ってない生徒もいる。またよく観察してみると、高度な問いに食らいつくあまりに、本文の細かな読解を軽視する傾向があり、細かく理解しているかと思えば、直感的に理解して、わかったような気になって答えていることもある。

今まで教えてきた生徒達は、評論文となると、その一文一文を追うのに精一杯で、何が書いてあるのかを理解するのに一苦労し、抽象度の高い語句が並ぶとたちまちに拒否反応を示すといったパターンであった。そこで私は、その難解な部分に関連したたとえ話や小話をして、興味を引くようにしていた。その内容は、本文から逸脱することもあったが、その目的は、身近な出来事や話題と、本文との関連性を常に意識させようということにあった。

しかし、本校の生徒はそのような身近な話題よりも、(身近な話題にも大いに興味を示すことはあったが)さらにアカデミックな内容を好んでいるようだった。その背景はいったい何なのだろうと不思議に思っていたが、今まで教えてきた生徒達と圧倒的に違うことがあると気がついた。それは読書量である。アンケートを取ってみると、月に本を四冊以上読む生徒はクラスに八人ほどおり、月に二、三冊という生徒も合わせると、十五人になった。中学校一年生のクラスでは八割の子が趣味は読書と答えており、読書量という背景の違いを思い知らされることになった。

三 指導の実際

【指導の目的と方法】

「自然と人間の関係をとおして考える」(内山節氏・大修館書店・国語総合)は近代化の中で自然と人間とのかかわりが変化してきたことを述べ、人間と自然との営みの再創造を提唱している。生徒にとって、近代化という概念を理解し、自然と人間との関係について作者の考えを理解し、さらに作者の考えを通して、これからの社会のあり方について考えを持たせるといふ教材であることから、目標を次のように立てた。

- 1 文章の内容を叙述に沿って正確に理解する。 ↓ 板書を中心に授業展開を行う。
- 2 文章の構成や論理的展開をとらえる。 ↓ 授業の発問の中でとらえさせる。
- 3 文章を通じてものの見方考え方を深め、自分の表現としてまとめる。 ↓ 意見文を書かせる。

【授業展開】

時限	目標	指導内容	備考
第一時	・「近代化」について関心を持ち、問題意識を持つ。 ・文章の全体内容	・自然の荒唐が問題になりはじめたのはいつ頃か、問いかける。 ・未来科学者アルビ	・学習の動機付けとする。

<p>を大まかに理解する。 ・形式段落1～8を理解する。</p>	<p>・前時の復習 ・形式段落9～12を理解する。</p>	<p>・前時の内容を発問によって理解する。 ・自然と人間との関係が無事に維持されていたときの要件とはなんだったのか、について理解させる。 ・近代化によってそれがどう変化したのか文章に即して理解させる。</p>	<p>・理解を深めるため、発問を変えて、論理展開を意識しながら考えさせる。</p>
<p>を大まかに理解する。 ・形式段落1～8を理解する。</p>	<p>・前時の復習 ・形式段落9～12を理解する。</p>	<p>・前時の内容を発問によって理解する。 ・自然と人間との関係が無事に維持されていたときの要件とはなんだったのか、について理解させる。 ・近代化によってそれがどう変化したのか文章に即して理解させる。</p>	<p>・理解を深めるため、発問を変えて、論理展開を意識しながら考えさせる。</p>
<p>を大まかに理解する。 ・形式段落1～8を理解する。</p>	<p>・前時の復習 ・形式段落13～20を理解する。</p>	<p>・前時の内容を発問によって理解する。 ・近代化以後、時間とともに進歩するという概念を滑り込ませた結果、自然との調和が崩れてしまった</p>	<p>・前回と同じく、復習のために発問のことで復習のための板書は行わず、聞く力、話</p>

<p>第四時</p>	<p>・前時の復習 ・内山氏の考え、アルビン・トフラー氏の考えのどちらに立つのか、自分の意見をまとめる。</p>	<p>・内山氏の意見を再確認させる。 ・意見文用紙を配布し、何について書くのかを確認させる。</p>	<p>・内山氏の意見を再確認させる。 ・意見文用紙を配布し、何について書くのかを確認させる。</p>
<p>す力を伸ばす場だと設定して、時間を取る。</p>	<p>・意見文用紙に詳しく指示をおき、混乱がないように工夫する。</p>		

【板書計画・生徒の作文】資料1・2・3・4参照

【指導の分析と課題】

・最後に意見文を書かせ、そこで内山氏の考えを理解させるとともに、自分の考えを述べることによって、もの見方考え方を深めさせようとしたが、それだけでは単純に賛成・反対という二方向に陥りやすいと考え、別方向の視点は取り入れられないかと考えた。そこで思いついたのが、未来科学者アルビン・トフラーの「第三の波」でトフラーが提唱していた時代の流れであった。「第三の波」は一九八〇年に発行され、二十一世紀を予告する世界的ミリオンセラーとなった。導入部分で「第三の波」の「波」の概念について説明すると、生徒はかなり聞き入っており、興味深そうであった。この話をした後で、学習後、自然と人間の未来について考えてもらうことを予告した。

・その後の展開はオーソドックスな読解の展開になった。教育実習後で期末試験まで四時間しかないということで、時間的にも余裕がないということもあり、板書による展開となった。文章を叙述に沿って丁寧に読み進めていくという学習は、生徒にとってはある意味、教科書の要約の穴埋め問題をやっているような、いわば「作業的」な学習のようで、書いてあることを聞くだけの余り刺激のない学習であったように感じられた。アルビン・トフラーの話をしたときの食いつきと目の色が明らかに違っていった。私が今までに授業をしてきた生徒達は、一読してもわからない内容を、授業で一つ一つ読み解いて積み重ねていくような態度で臨んできたものだったが、同じやり方でも生徒の実態によって「読解」指導は変えていかなければならないのだな、と自分の力量不足を感じた。

・各授業のはじめに、「前回の復習」の時間を取り、発問をしながらか答えさせ、確認をしていった。聞く力、話す力を付けさせる狙いでやっているが、聞く力、話す力ともに個人差が激しく、このあたりの全体的な底上げの必要性を感じた。逆に、もしかすると、叙述を丁寧に追う学習がその生徒に不足していたのではないかと思われた。

・最後の意見文は大変に集中して書いていた。全体として、書く力はかなりあるように感じられる。ある程度多い量を書かせても、きちんと書いている。また多くが内山氏の意見をふまえ、またはアルビントフラー氏の意見をふまえ、さらに自分の考えを述べているという内容であったので、基本線は押さえられていた。内山

氏賛成派 一人、トフラー氏賛成派 四人、独自の考え提示九人という結果になった。内山氏賛成派が多くなると予想はしていたが、独自の考え方を提示する生徒の作文に非常に熱がこもったものが多く、これにも驚いた。教材の内容だけにどまらず、情報化社会、産業革命、核開発、科学の発展など、盛り込んだ内容は様々であった。これは読書量に関係があるのかと思ひ、アンケート結果と照合してみたが、明らかな関係性は認められなかった。

・導入↓読解↓表現というオーソドックスな展開であったが、意見文を書かせた後の処理については二学期以降の課題となった。読む↓書く↓教室で共有する↓さらに深める という事で読み深めが可能になってくると思われる。グループ学習、ディベートなどで読み深めはできるのではないかと、思われる。しかし、限られた時間で、「共有する」という部分をどう確保していくか、が今後の大きな課題であろう。

・今回、ポイントとなったのはアルビン・トフラー氏の「第三の波」を導入としたことであろう。書物の一部を引用し、印刷して配布し、原典に触れさせれば良かったのかもしれないが、膨大な中身となり、実現しなかった。指導者の口頭での説明で終わってしまったが、授業に幅と深みが生まれたと言えるのではないか。

四 別の視点から

以上が私の実践報告であるが、同じ教材を本校の教員はどう取り

組んだのか、簡単ではあるが、紹介し、分析してみたい。

【時間の概念をカードに書かせる】

ある先生は「時間に進歩を伴わせるようになると、自然が必要とする、変化を求めない世界が壊される」という部分から発展させて、「時間」の概念を定義させ、絵を描かせて視覚化させる取り組みをされていた。(資料5) これも評論文を読み深めるひとつの試みではないだろうか。機会を捉えて、何らかの概念に対して認識を深め、考えさせるといふ機会を折に触れて作ることは、生徒のものの見方を広げるという意味でも重要である。しかも、時間的余裕のない場合でも、余り時間を取らずに気軽に機会を設けることができる。これについても、書いた物をどう共有し深めていくか、が課題になるであろう。

【関連性の深い文章と組み合わせた取り組み】

またある先生は六時間の時間を確保できたと言うことで、様々な取り組みをされていた。

第一時

「自然と人間」というテーマで自分の考えを二〇〇字以内で書かせ、一〇人程度の生徒にその意見を言わせる。自分たちの意見と何が違うか、同じなのか、考えながら本文を通読させ、その後、筆者の意見の中で目新しかったもの、違っていた点を挙げさせる。(資料6)

第二時・第三時・第四時 本文音読の後、読解

第五時

「武蔵野の風景」(中三教材・学校図書・内山節氏)を黙読させ、「自然と人間の関係をとおして考える」との相違点を探し、プリントに線を引いたり、メモさせる。その後、発表させてまとめる。

第六時

二〇〇字要約をさせる。

導入に学習前の生徒の「自然と人間」に対する認識を書かせておいて、動機付けとし、読み深めさせるという方法、発展学習として、内山氏の書いた別の文章(テーマは類似)を読ませ、さらに深く読ませ、さらにまとめとして要約させている。文章を叙述に沿って的確に読み取り、要約するという基本的な学習でありながら適所に配置させ、要約が学習のまとめとなっている点も読みを確かなものにする指導であろう。同じ内山氏の文章を読み深めるための題材として用いており、本文に密接に関係した文章であるだけに、類似点相違点も明確になり、さらに読みを深める契機となっている。

五 おわりに ～どう読み、どう深めていくか～

①「どう読むか」という部分では、基本的な読解の指導をなぞった上で、特に目新しい試みを提示できなかった。ただ、どう読むか

に当たっては、漫然と読ませるのではなく、目的意識、問題意識を持って読ませるということは必要であると思う。生徒自身の考えと比較させたり、他の意見と比較させたりすることで、このテーマについてはこういう考えを持っているが、この人はどうかとか、あるいはこのテーマについてこういう考えがあるが、この人はどうか、など、読むということに目的を持たせることは押さえておくべきであると思われる。

②本文を音読し、発問しながら、構造的に板書していき、生徒と読みを深めていく、という基本的な読解の指導については、人の考えをしっかりと理解する、人の話に素直に耳を傾け、理解しようとする、という姿勢を養うことになるのではないかと、昨今感じている。テレビやラジオ、インターネットなどで、一方的に情報が溢れ、聞こえとしなくても情報が勝手に入り込んでくる時代になり、情報過多という状況の中で、自分の興味・関心のない情報には反応が薄く、都合の良い興味のある情報にしか反応を示さなくなっているような、そういう気がしてならない。自分と異なる人の意見、考え方に触れ、何とかその人の考えを理解しようとする姿勢は、社会に出たときも、自分と異なる立場の人を何とか理解しようとし、耳を傾けるといふ姿勢に繋がるのではないかと。相手の意見に耳を傾ける、じっくり聞く、じっくり読むという姿勢は人間関係の基本でもある。読解力の低下が叫ばれるが、人間関係の構築にも関わる部分ではないかと、思っている。地味で退屈な作業であるが、何かしらの目的意識、問題意識を持たせ、その文章にじっくりと取り組んでいくという学習は人間形成の上でも大

切であるように思われる。そういう意味でも教室での発問、生徒の発言などの授業での言語活動についても、「聞く」という姿勢を大事にしたい。

③「どう深めていくか」という部分では、やはり深めるための「触媒」とでもいうべきもの（ここではアルビン・トフラールの「第三の波」であるとか内山節氏の「武蔵野の風景」であるとかの副教材）が非常に有効ではないかと考えている。このような題材が常にある程度ストックされ、テーマに合わせて供給できるほどのものが指導者にあるかどうかの問題になってくる。個人の努力はもちろん必要であるが、この教材にはこの副教材が効果的に使える、といった横の情報の共有ということも必要なのではないかと。

④本校に異動して、前任校と同じようなやり方で指導しても、きちんと答えが返ってくる。基礎学力の差といえればそれまでなのだろう。しかし圧倒的に違うのはやはり読書量である。語彙力を身につけ、物の見方、考え方を広げ、知的好奇心を高めてくれる大きな屋台骨はやはり読書なのではないかと。「どう読み、どう深めるか」が目の前の指導に終始してしまいがちな私である。もっと大きな視点で読解力を育成していくには、生徒の読書量を確保する必要がある。映像文化世代であり、情報化が進む時代にあつて、じっくり本を読む生徒は減ってきているのは確実だ。国語の時間にも「読書の時間」を組み入れる必要を感じている。読書案内の時間であるとか、読書紹介の時間であるとか、そういうものでもいいかもしれないが、それだけでは生徒の力量を引き上げるには及ばないだろう。この時期にはこの本を、この時期にはこの本を、

と言った指導者の側での読書案内、または課題図書として一斉に読書させるなどの取り組みが必要であると考ええる。(国語だけではなく、教科を超えて、学校全体の取り組みにしてもいいのではなか。い) いわゆる「高校生の読書案内」などといったものもあちこちにあるようであるが、学校によって学力の差がかなりあることを考えると、生徒の実態に合わせた学校独自のものがよりふさわしいのではないだろうか。

⑤前任校で「総合的な学習の時間」を担当し、デイベートを取り入れて論理的な思考力、表現力を身につける指導について取り組んだ。「深めていく」という段階で、グループでの話し合いやデイベート学習を取り入れると非常に効果的であると実感した。しかし日常の授業で取り入れられるかというと、週に二単位の現代文の授業では難しいだろう。大がかりなものではなく、日常的に取り入れることができ、積み重ねることができ工夫を今後も考えていく必要がある。

(広島大学附属中・高等学校)

【資料1】

自然と人間の関係とおして考える

内山節

【はじめに】

自然の荒廃 1955 1973 高度経済成長長期

・ 直接 ① 森林破壊 水質汚濁

大気汚染 ゴミ問題

→ 水俣病 イタイイタイ病 四日市ぜんそく

・ 間接 ② ソン 層破壊 酸性雨 地球温暖化

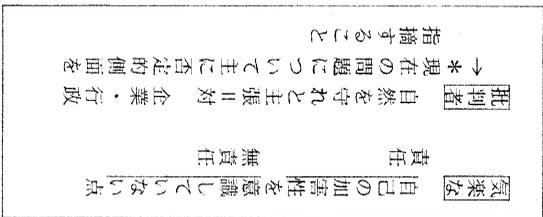
【参考】 未来学者 アルビン・トフラー 「第三の波」

- ① 農業革命 ② 産業革命 大量生産 大量消費 中央集権化
- ③ 脱産業社会（情報化社会）

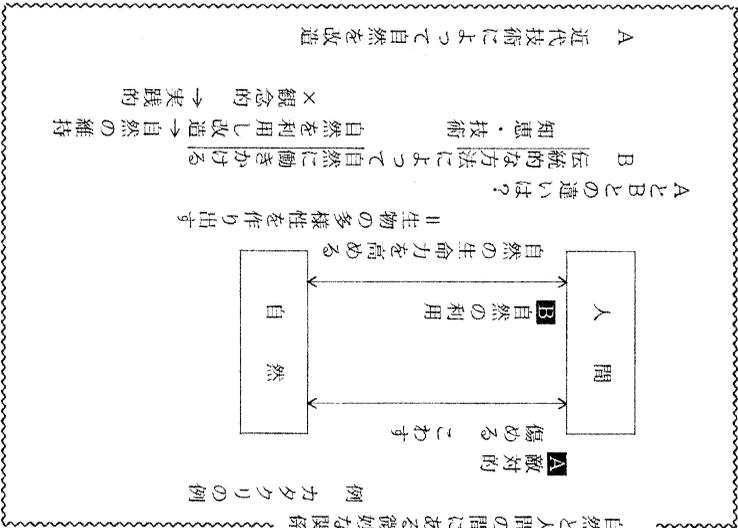
【自然と人間】

大々 〓

意識
・ 大規模な開発
・ 自然の減少



次第にそれだけではすまなくなる



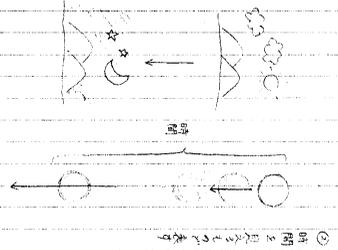
1. 時間の定義(相対化)

時間とは止まらぬ流れである
永遠に流れていく物である

2. 時間の視覚化

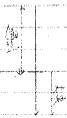


① 時間とは、木霊に響く時の流れ

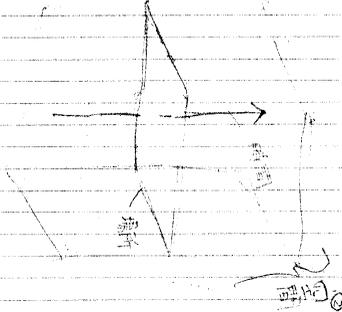


② 時間とは、木霊に響く時の流れ

① 時間とは、木霊に響く時の流れ



② 時間とは、木霊に響く時の流れ



人間と自然

今、自然は人間の力によ。ておがやかされ
 ていて、人間と自然は対立の関係にあるとい
 えろと思。う。
 現状への対策として、人間が自然に対して
 力を及ぼすのをやめて、す。こ昔にそうであ
 りたように、自然の中で生きていくという方
 法もあげられる。しかし人間の力が膨大なり
 のにな。た今の世界でその方法は実行できな
 いと思られる。人間の技術でこの関係を改善
 し、人間と自然が共存していくべきである。

20 × 10(300字)

広島大学附属中・高等学校国語科 (年 月 日)

人と自然は密接な関係がある。互いに依存
 している。人は自然に対して食物や水を取り取
 り、空気を呼吸し、自然は人の手によ。て荒れ
 たり、火を焚いてもら。たり、土を踏み固めら
 れ、土が硬くなり、土が破壊している。自然は依
 存して、いくからには破壊して、付加する。微妙
 なバランスを維持する。自然に手を加えて
 保全していく必要が、今後あるだろう。

1 × 10(300字)

広島大学附属中・高等学校国語科 (年 月 日)